萬葉拾穗抄

四之下

わがたもとまかんと
袂をまくとハ袖枕して
ねる事なりと也赤丸
が志らかきを感じてか
の心からや家に白髪
あるにかへてかくよす
るにしかしなるにけん
と返しをハ推量する也
しかりけるにこそ
采葉云此歌もしく此
ハ其物にも此上ハ 玉葉
白髪せるハ謙なり
ねいさもむかす同じ
然としの事すハ謙
他とりく此ことんとし
謙なるハ哀なれと也

なにしかも使のきつる
待つてハ待るるれど
はつはなのちるべき物を
二三の句ハ初て逢ひて事
をよろこべる也 うき
人ごとにかゝりて止
むしを嘆く意成へし
うはへなきものかも人ハ
八雲御抄云うはへハあさき
得羽童無とかけり情
なき也 仙曰うはへハ
きハ上にもあきと云心
也それに情なきこと
とハ又上にも有しと云
玉葉に本歌を撰ふ也

報贈佐伯宿禰赤麻呂歌一首 娘子

吾手本 将巻路念牟 大丈者 戀水定 白髪生二有
わかたもとまかんとおもハんますらおハ
おちみづもとめしらかおひにたり

和歌一首 佐伯宿禰赤麻呂

白髪生流事者 不念 戀水者 鹿煮藻 闕煮藻 定而将行
しらかおふることハおもはずをちみつハ
かにもかくにももとめてゆかん

宴席歌一首 大伴四綱

奈何鹿 使之来流 君乎社 左右裳 待難為礼
なにしかもつかひのきつるきみをこそ
とにもかくにもまちかてにすれ

佐伯宿禰赤麻呂 一首

初花之 可散物乎 人事乃 繁尓因而 止息比者鴨
はつはなのちるべきものを人ごとの
しげきによりてよどむころかも

贈娘子歌二首 湯原王

宇波弊無 物可聞人者 然許 遠家路乎 令還念者
うはへなきものかも人ハしかばかり
とほきいへぢをかへすおもへば

目二破見而 手二破不所取 月内之 楓如 妹乎奈何責
めにハみて手にハとられぬ月のうちの
かつらのごとき妹をいかにせん

めにハ見て手にハ 伊勢物語に背かれても心ハ同 童蒙抄云月の桂と云

月中に桂樹をうゑたるさま百丈下にひとりの人ありて樹をきる此は呉
名は剛といふ桂男といふ事は華厳経に云閻浮提の地に閻浮樹あり一名を
波利質多(ハリシツタ)一名は珍樹高さ八万四千里樹影(ジユエイ)月中にうつる世人月を
みる時に樹あるやうに見ゆる是すなはち閻浮樹の影也
いくばくもおもひけめ
片去は枕をさりて居る
也片は助字也我枕をさ
りてもねずと見えし也

報贈(カヘシヲクル)歌二首　娘子

幾許　思異目鴨　敷細之　枕片去　夢所見来之

いくばくもおもひけめかもしきたへの
まくらかたさるゆめにみえこし

家二四手　雖見不飽卑　草枕　客毛妻与　有之乏左

いへにしてみれどあかぬをくさまくら
たびにもつまとあるがともしさ

いへにしてみれどあかぬを
家にて常に寝なれたる
にあかぬ王を懐きて
も二人あるがのごとく
われもまたは伴ひ行まし
ゆかしと伴ふもは妻と
ともにあるまじ
草枕たびにハ妹ハ

亦贈歌二首　湯原王

草枕　客者嬬者　雖率有　匣内之　珠社所念

くさまくらたびにはつまはゐたれども
くしげのうちのたまこそおもほゆれ

こまくらもいさなへるもと
同さうひまぬれたまとも
をこの内なる玉はもち家を
何とはさず樹中子家
すなほしきなりいふき
のごとくなるべし　論語曰有美玉於斯韞匵而蔵(ヒキヨク　コヽニヲサメテヒツニ　カクシヲサメ)といふも子貢孔子の言に
玉をかくるゝ匵の中におさめてといふ所也
わがきぬをかたみ　まつりすは奉る也我衣を形見にやりなれば枕をさけず
まきてさねませ

余衣　形見尓奉　布細之　枕不離　巻而左宿座

わがきぬをかたみにまつるしきたへの
まくらをさけずまきてさねませ

復報贈歌一首　娘子

吾背子之　形見之衣　嬬問尓　余身者不離　事不問友

わがせこがかたみのころもつまどひに
わがみはさけじこととはずとも

わがせこがかたみの衣
つまどひは妻問の意也鹿
の妻どふをつまどふといふ
心と同じ事をいはずとも
形見の衣は抱きてねたる
同じことをするゆゑに
あらむ人のことなれば

亦贈歌一首　湯原王

多を離つよしまさとし

638
直一夜隔之可良尓荒玉乃
月歟經去跡心遮
たゞひとよへだてしからにあらたまの
月かへぬるとおもほゆるかも

たゞ一よへだてたるに
何しか月日は隔なし
隔とゆゑ持あまれハ心の
こゝろは毛詩ニ一日
不見如三秋ちとある
と同じ心也

639
復報贈歌一首　娘子
吾背子我如是戀禮許曽夜干玉能
夢所見管寐不所宿家禮
わがせこがかくこふれこそぬばたまの
ゆめにみえつゝいねられずけれ

わがせこがかくこふれこそ
恋れこそハ恋れハこそ也
いねられずとハねられ
ぬなれ也我背子も我を
かくこふごとく恋れバこそ
我が夢にみえてつねに
ねられぬと

640
亦贈歌一首　湯原王
波之家也思不遠里乎雲井尓也
戀管將居月毛不經國
はしけやしまぢかきさとをくもゐにや
こひつゝをらん月もへなくに

はしけやし古来風体抄にはしきやし
まぢかきとハいねまでとくれ今ハむかしのまゝに須ども
喜撰式よりはしけやしハ女を云と後撰乃
髄脳　綺語抄　奥儀抄等此説を用ゆ　顕昭袖中抄にハ却ることに
おもふ程しそしきやしけやし同じことなれども古来風躰
也此等ハ喜撰式のごとく女をいふにはあらじ此女は遥
てはなほ月もへぬに遠き里かの雲の遠きなるやうに恋つゝをらんの心

641
復報贈和歌一首　娘子
絶常云者和備染責跡焼大刀乃
隔付經事者幸也吾君
たゆといはゞわびしみせんとやきたちの
へつかふことはさきくやわがきみ

ゆゑといはゞわびしみせんと
焼太刀ハやいばの鋒
といふ枕なり　太刀
へつかふのへハ身也太
刀ハわきのつけものなれば
付身にて付經と云
身をはなれずと譬ふ
離れんことを惜みてそ
だきてはいかにやと時説
仙覚説太刀乃痕あるを
へつかふと云ことは誤り也

642
一首　湯原王
吾妹兒尓戀而亂者久流部寸二
懸而縁与余戀始
わぎもこにこひてみだれはくるべきに
かけてよせんとわがこひそめし

わきもこにこひて
童蒙抄云反轉とハ糸をかけてくるぬきをいふ　仙覚云くるべきハ糸をくりくる

せわくとにも妹ふしておもひこかるゝし万葉集心ハ久流部すハ然らくよ
れといふ人枕詞しわきもこに逢ミまれかうけて我方よりきまれと我こひ
妹かとも立帰り云心
世のあはれわとめ〳〵し

怨恨歌三首　紀女郎

世間之女尓思有者吾渡
よのなかのをみなにしあらハわかわたる
痛背乃河手渡金目八
あなせ乃川をわたりかねめや

怨恨歌とハうき男を
うらむ哥也痛背河ハ
未勘痛背といはん為に甘
てうらひつく苦痛なる
る男によせてよめる歌也
かく憂瀬乃渡りかたき
を我ハ堪てく渡る
と世の中乃女ならハ我
ごとく渡りかねんや只わかしてわたらんとし　イ云世の中にあれハ
とハ我も世をもえしらぬ女ならましかハるうき瀬をも渡りかねてあるせの
川をも渡りかねんやとしうき夫を怨恨の哥也

今者吾羽和備曽四二結類氣乃緒尓
いまハわハわびぞしにけるいきのをに
念師君乎縦左思者
おもひし君をゆるさくおもへハ

いまハわびしにハりといふ　別を歎く哥なり　いきのをとハ命也　命の如く
別おしくおもひし君をさるゆゑさくれハゆるしやらんとおもふハ今
ハ我も徒らにたへかねてまことし
しろたへ乃袖わかるへき
日も別を歎く意也
別つき比ゐてなけれと
心むせひつゝしとそ

白妙之袖可別日乎近見
しろたへ乃袖わかるへきひをちかみ
心尓咽飲哭耳四所泣
こゝろにむせひねのみしなかゆ

佐保大納言卿　長屋也
高市大卿　天武天皇の浄子長屋王乃父太政大臣乃給也
相問起居　安否を問也
ますらをのおもひわひつゝ
あまたたひ雑の人を歎く
哥なりやかてますらお
として思ひ侘なく歎
く歎ハ雑の人かおひて

一首

坂上郎女者佐保大納言卿之女也駿河麻呂此高市大卿之孫也両卿兄弟之家女孫姑姪之族是以題歌送答相問起居

大伴宿禰駿河麻呂

大夫之思和備乍遍多
ますらをのおもひわひつゝあまたゝひ
嘆久嘆乎不負物可聞
なけくなけきをおはぬものかも

一首　大伴坂上郎女

647 648 649

まむかひかへきみ
さる事もなきハおもひ
ねがひし末を頼り
添て歎とす也と云也
ころにハ長くも思ひく
さりなきし人年なく
まつしくそへさへのまへ
中あれハ長すらる何
なさる歎をよめり
何いへすそけなく
氣長くとハ嘆息の意
おこ注よしゆきやハ
好去哉ご云よろしく也

心者　忘日無　雖思（こゝろにハわするゝ日なくおもへども）
人之事社繁君尓阿禮（ひとのことこそしげきゝみにあれ）

一首　大伴宿禰駿河麻呂
不相見而氣長久成奴比日者（あひみずてけながくなりぬこのころハ）
奈何好去哉言借吾妹（いかによしゆきさやいふかしわぎも）

一首　大伴坂上郎女
夏葛不絶使乃不通者（なつくずのたえぬつかひのよどめれハ）
言下有如念鶴鴨（こともしあるごとおもひつるかも）

そはやとい心に師説とはゆうハゆうと同イいくゆきしやといへり
ありゆきしやとはありやも
かつらそれもしね　夏葛ハよく茂えてたえまあれハ絶ねはといはん枕

650 651 652

将来し日比ハ絶ぬ使のたえたりねハ事しもあるやうくおもはれて

離復相歎歌一首　大伴宿禰三依

吾妹児者常世國尓住家郎思（わぎもこハとこよのくにゝすみけらし）
昔見従變若益尓家利（むかしみしよりわかくなりにけり）

心をしるしとし
わぎもこハとこよ此意
常世とハ八雲抄云是よ
りの世界也とこよハ仙
家をも云へすみてと
きハある也玉葉わく人
ましかハわかやきますと
いこまりてわかしくも
同じ離別のち猶へて
おそるゝに容顔昔よ哉
らぬありとよめるし
久かたの何れ此露霜
夜も秋来てハ冷
く露霜重そしかハ
なそし景物に感發せそ

二首　大伴坂上郎女
久堅乃天露霜置二家里（ひさかたのあまの露霜おきにけり）
宅有人毛待戀奴濫（いへなる人もまちこひぬらん）

玉主尓珠者授而勝且毛（たまもりにたまハさづけてかつ〳〵も）
枕與吾者率二将宿（まくらとわれハいざふたりねん）

653 654 655 656 657

家をとおりに心あらしやかにけるかりの哥にや
あらわりしかとし イにあねは人あハあ点我用にて男をも玉に比して見る本
妻の男を制するを玉主といふなるへし 又妻は玉主とハ男なるりと云説あり

三首　大伴宿祢駿河麻呂

情者　不忘　物乎　儻（イわくらはに）　不見日（イあひ）数（イ多）多　月曽経去来

こゝろにハわすれぬものをたまさかに
見ぬ日かずおほく月ぞへにける

相見者　月毛不経爾　恋云者　乎曽呂登吾乎　於毛保寒毛

何ひみて八月もへなくにこふといはゞ
をそろとわれをおもほさんかも

不念乎　思常云者　天地之　神祇毛知寒　邑礼左変（イさかわり）

おもはぬをおもふといはゞあめつちの
かみもしるらんさとれさかわり

さとりかハさハ助字なるへし

こゝろにハわすれぬものを
心ハ明し イに点下るわり
ふに見ぬ日のあまた
月ぞへるなる 心ハ日
何ひだく八月もへてに
仙日とうろハ空言と云
也 東詞也 釜又月
もへぬに妹ともいそく
ころとハうんくとよめ
る 又安云をうろかお
うろし出也とも
おもしねをおもふと
されさくり 又安云神をし我身に入りたりと云 万葉にあるかに知らんの
心也 我おもはぬをおもふといはゞ天地神祇も知らんに入りか照覧ん
ひまとし イさハかり たのしくさとりかね知るへしと

六首　大伴坂上郎女（ノヲトメ）

吾耳曽　君尒者恋流　吾背子之　恋云事波　言乃名具左曽

わのみぞきみにはこふるわがせこが
こふといふことはことのなぐさぞ

不思常　日手師物乎　翼酢色之　変安寸　吾意可聞

おもはじといひてしものをはねずいろの
うつろひやすきわがこゝろかも

わきもこのちうきみにハ
童蒙抄云わかせこそ
男をたこゝろのなくさ
なこハこゝのなくさめ
持とりかけり
おもはじといひて
翼酢（ハネス）　唐棣花也
和名抄袖中抄云はねす
といふ花の色なるこ
万葉十八にはねすの色の深くもよめり 中略
仙覚云唐棣花（ハネス）をはねすといふ各別説あり 庭梅（ニハサクラスモヽ） 李花木蓮（ハチス）あり
又はねすと云 證據（ショウコ）をよめるにも 検本草云 陸機（リクキ）草木疏（ソ）云 唐棣即奥（イクリ）
李也 乃至 其花或白或赤 六月實（ミ）成云 これはなりてえねすといへるい
ろハ此の用る所赤色なるへし 十一巻哥にそねすなとのあかとの詠

とよめるよの故也又日本紀第二十九天武天皇十四年秋七月乙巳勅定明位以
下進位已上之朝服色浄位已上並着朱花朱花此云波泥孺云々略注之
愚案是袖中抄乃説ニ符合也詞林采葉云奥李庭櫻月草なとの
姿なるまいれ叶ひとて木蓮なるへきれ彼花は用き実なるもうつ
ろひやすきとよめるも木芙蓉とみてよりと云ニ玉葉木芙蓉は赤
く朱花と云へし翁咲夕菜ニ移ひ安きこ哥乃心ハ一よひなりとひなり
ら又色てきるよりてうつろひやすき我心とこ八雲にもすみ
色ハ移ひ安きこ率よら作
おもへとしるしもなしと
それとしるとも
れなきこ人と相知ねと
りろ共に立帰るとて
かねてより人こと繁く
しるしや見安云よりやこ
おきもいかにハ吾東うなとを
いてさくるなんと

658
雖念　知僧裳無跡　知物乎
おもへとしるしもなしとしるものを
奈何幾許　吾戀渡
なにかくそくもわかこひわたる

659
豫　人事繁　如是　有者
かねてよりひとことしけくかくあらは
四恵也　吾背子　奥裳何如　荒海藻
しゑやわかせこおきもいかにあらめ

660
汝乎与　吾乎人曽離　奈流　乞吾君
なをとわをひとそさくなるいてわかきみ
人之中言　聞起名湯目
ひとのなかことききおこすなゆめ

一なきハ如くと同初
りまれとし行しハ見え
あそともわと人うさく
あをのをハ助字といて
さハ歎行之わすれハよう
君と汝と我を人さくん
とすゆめく吹えるを
こひくて行るとまてみ
うつつきことハ袖ら
まきるまとちく来りけて
とまつてみくりすなれ
としけめくハさしも
らしくやさしき也
何こ乃山いをへくせる
何この山ハ是れ伊勢こ
さての済も同也　何

661
戀戀而　相有時谷　愛寸
こひこひてあへるときたにうるはしき
事盡手四　長常念者
ことつくしてよなかくとおもはは

一首　市原王

662
網児之山　五百重隠有　佐堤乃埼
あこの山いほへかくせるさてのさき
左手蠅師子之　夢二四所見
さてはへしこかゆめにしみゆる

一首　安部宿禰年足

663
佐穂度　吾家之上二　鳴鳥之
さほわたりわきへのうへになくとりの
音夏可思吉　愛妻之児
こゑなつかしきはしきつまのこ

一首　大伴宿禰像見

664
石上零十方雨二将關哉　妹似相武登言義之鬼尾

いそのかみふるともあめにさはらめや　いもにあはんといひてしものを

この山のやへしかくせるさての浦とハたまそへし子といへん序哥しさてさしえてあるハ是と同く或ハ携し女を岳小苗つむすこ杉悩河の鮎つる乙女の類にて其意ハたゝ携へし女乃事を見て心あり和名曰纚　文選註云纚網如箕形狭後廣前名也　玉篇　袖中抄ニ此哥をあまとて乃とよめるハ誤りや又或説ニさてへしあミとするハ義むつかし　左用ひされわたりわたさへの　大和乃佐保乃邑乃我家之年足々家ニて佐保ちかく一あく乃のとハ左ほつりしさといひん枕詞ことハ其ひ書を以て佐保の家のさひ書れニ云まつりしさといふ　石上ハ大和布留といへん枕詞にてあるといへの年のあまりも同し　とせるを妹ニあらんとちまりしくハりてあらんとと　山哥　類聚万葉ニハ妹よあらんといひてとよめり　仙本ニハちまかし　あそとよむ

大伴坂上郎女　郎女と蟲滿と従兄弟なれハきこしなてきこえい

一首

大伴坂上郎女之母石川内命婦
與安部朝臣蟲滿之母安曇外命婦
同居姉妹同氣之親也縁此郎
女蟲滿相見不踈相談既密聊作
戯歌以為問答而已

665
安部朝臣蟲麻呂

向居而雖見不飽吾妹子二
立離往六田付不知毛

むかひゐて見れともあかぬわきもこに
たちわかれゆかんたつきしらすも

て打越てひつ山こうまの哥は巻七ニあしくさまて
内命婦外命婦とは婦人の五位以上を蒙るを内命婦とし五位以上乃妻を外命婦といふ令義解ニ云又周礼注ニ内命婦ハ九嬪世婦也外命婦ハ公卿大夫妻也ニ

666
二首　大伴坂上郎女

不相見者幾久毛不有國
幾許吾者戀作裳荒鹿

あひみぬはいくひさしくもあらなくに
こゝたくわれはこひつゝもあるか

667
戀戀而相有物乎月四有者

こひこひてあひたるものを月しあれは

むかひゐて見れとも一うきこ八雲御抄云さきわけミと王葉立わかれん言もわかしすはるの吾あひ見ぬはいくひさしくもあらなくにこゝたくハいくそくもこゝろしく

おほすてゝいくなる
き月数もあまねり
てゝあひたとなしおのかれあこし
こひ〳〵てあひける物を 仙覚此歌第四句夜ハこもるらんと和せとへ
し月しあれハ夜ハふかしといへる也萬葉志らし
あかまてハ暫時そわれこゝに虫丸の別を歎くに見て別をいそくなる
わかさ(?)ハ日ふたつの山
鄙のよハ此宮の
朝日ふた付山の雲の
ゐりくとうにいそひ
よりしまきと序なり
みよけて忘の事也
あしひきの山橘の
山橘ハ藪柑子といひ
て赤き実なる物なり
是ハ色に出てといへ

夜波 隠良武 須臾 羽蟻待
よるハこもるらんしはらくはありまて

一首 厚見王

朝尓日尓 色付山乃 白雲之 可思過 君尓不有國
あさにけにいろつく山のしら雲の
おもひすぐへききみにあらなくに

一首 春日王

足引之 山橘乃 色丹出而 語言繼而 相事毛將有
あしひきの山橘のいろにいてゝ
かたらひつぎてあふこともあらん

ん枕詞よりかゝれり
こめてのおもふ人に
なにかれて語継く
語すてゝあらはも
あふこともあらんと也
月よみのひかりは
月讀ハ月のこと
日本紀ニ月讀月夜見
月弓皆月神をいふ
月影のきよくさやかなるを
まどふこゝろはまどふこと
月よみのひかりはきよく
月清くてまどふ心を
しつたまきハ何にかゝれる
も倭文手纏ハ數のうへの
しつたまきかずにも

一首 湯原王

月讀之 光二來益 足疾乃 山乎隔而 不遠國
月よみのひかりにきませあしひきの
山をへだてゝとほからなくに

和歌一首 作者不詳

月讀之 光者清 雖照有 惑情 不堪念
月よみのひかりはきよくてらせれど
まどふこゝろぞたへずおもほゆ

一首 安倍朝臣蟲麻呂

倭父手纒 數二毛不有 壽持 奈何幾許 吾戀渡
しづたまきかずにもあらぬいのちもて
なにかこゝだくわがこひわたる

二首 大伴坂上郎女

673
真十鏡 磨師心 乎 縦者
まそかゞみ とぎしこゝろを ゆるしてば
後 尓 雖云 驗 将有 八方
のちにいふとも しるしあらめやも

674
真 玉 付ィつき 彼此ィをち 兼 而 言 歯 五十戸 常
またまつく をちこちかねて いひハいへど
相 而 後 社 悔 二破 有 跡 五十戸
あひてのちこそ くいにハありといへ

しづたまき 八雲抄云
げすと数ならぬよし
万葉考ハ賤女とも玉足
たまきと賤環と云也残
身のかずなれハ数な
らねとつゞけし残さ
またいやしき我とも
奥にてけよめり 吾心ハいやしき微命なれど数にも又知ラ存するかなと
まそかゞみとぎし心を 此郎女おのが怨恨歌にも此詞を用ひて我心を見よかし
後とかくみだれさすべくこそ我の一旦ゆるしたとてから
けかいけれど八いかばかり悔みぬべしといふ心も有べし
まことにいくかちこち 凡安云玉を付る緒とつくる也 万葉考ちこちか
ねぐとハ未来に近き時とハ近き将来の理を知りて言ひたる
ゆるして八後にいかなる事ともいひふらし人の思ひいでのちにハ人の
心に思ひいれとも何事も言ふべくやしきとも
そけむ心のうこと しくひろハるとさへと八悔とハなるといふなれとぞ

贈大伴宿禰家持五首

中臣女郎

675
娘子部四 咲澤二生流 花勝見
をみなへし さきさハにおふる はながつみ
都毛不知 戀裳摺可聞
かつてもしらぬ こひもするかも

676
海底 奥乎深目手 吾念 有
わたのそこ おきをふかめて わがもへる
君 二波 将相 年 者 經 十方
きみにハあはむ としはへぬとも

677
春日山 朝居 雲 乃 欝 悒ィ
かすがやま あさゐるくもの おほゝしく
不知 人 介 毛 戀 物 香 聞
しらぬ人にも こふるものかも

をみなへしのくさつき
序歌也 童蒙抄云花の
ちにハ花のさかる 蒔
とふ 万葉かけくもしし
らねとハ意こぞすりけり
て知まりしかるはしなて
をしあてりのはまるや
わたのそこおきをふかめて
古今集にもゆのよきの也ハ
深く思ふ事也深く我思
君にハ一旦にも月由あり
すまもまへてしめ不にの
そんとし
かすか山あさゐる雲の
祇同移居雲乃深くていつことも知らず初めゝ人をさふにようてさる
万葉考一二乃句ハおぼつかなくいかん序歌也 しらぬ人とハ祇注

のこく論ずる人をいふ也 奇旅泊類聚等にハおもふらむとよむと仙覚
おもくとよむおもくさきをおもふらむと同し
たゞにあひてみてこそ
みてはのみこそハ助字也
たまきはるハ命の枕詞也
お二須命に向ふハ命に對
する意也命を掛るさ
き掛れたしてちかふ也
思ふこゝろ命に絶て
いふ意にていひやかれぬ
ありではかくてくまりあきこひのやまれんとそ
いなといはゞしひめんや 我はすこし背子もしゐてもしひにハいはぬそ
しひられて立るらん
とおもふくさひやる也
菅の根乱れの枕詞也
交遊 友達をさす

直相而見而者耳社靈剋
たゞにあひてみてばのみこそたまきはる
命向吾戀止眼
いのちにむかふわがこひやまめ

不欲常云者將強哉吾背菅根之
いなといはゞしひめんやわがせすがのねの
念亂而戀管毛將有
おもひみだれてこひつゝもあらん

與交遊別歌三首
大伴宿禰家持

けだしくも人の中言
蓋くとしくもハ助
字也けだしハ他を推
はかり疑ふ詞也こゝろ
ハうたがふ也人の中言
とは中へはさかひて
くまそこも海まて
也別し給ふ心
中くふ心てねそいひて
一向に思ひてよ給ハ
ゆふきしといひつ命
をかけて我を思ふんや
ありける人に寄る心
いふよのりなき言
紅のいろといはん
枕詞也口にさかるさまを

蓋毛人之中言聞可聞
けだしくも人の中ごときけるかも
幾許雖待君之不來益
こゝだくまてどきみがきまさぬ

中中尓絶年云者如此許
なかなかにたゆとしいはゞかくばかり
氣緒尓四而吾將戀八方
いきのをにしてわがこひめやも

將念人尓有莫國懃
おもふらん人にあらなくにねもころに
情盡而戀流吾毳
こゝろつくしてこふるわれかも

なまなかなるさまいひてそ袖もふる
交遊のあひだをいふ

大伴坂上郎女七首

謂言之恐國曽紅之
いふことのかしこきくにぞくれなゐの

あれハ恋死ぬとも名に
いでゝ人にしらすなといへり
きこえそれんとて
つゝしめいはしめ心色
今ハわれハしなんよ
生てありても君が我に
よるべしともいはぬなり
死なんとをはやと思
あらば重ねし
人ことを繁みや
見安云二さやハ二乃刀
乃さやに此也 師説二面

色莫出曽念死
いろにな出でそおもひしぬとも

684
今者吾波將死與吾背生十方
今はわれハしなんよわがせいけりとも
吾二可縁跡言跡云莫苦荷
われによるべしといふといはなくに

685
人事繁哉君乎二鞘之
人ことをしげみや君を二さやの
家乎隔而戀作將座
いへをへだてゝこひつゝまさん

686
比者千歳八往裳過與
このごろは千とせやゆきもすぎぬると
吾哉然念欲見（イみまくほり）鴨
われやしかおもふみまくほりかも

家し家小人乃身をいるゝ事刀乃鞘のごとくあれバ身の心ハれ
さいまつかくらきへことを隔て家をへだてゝ恋つゝゐんと歌之
このころよちとせや千とせもすぎぬるかと見まほしく思ふゆゑにさへ
千とせもしゆきすぎぬると思ふことハさやうに見まほしきゆゑの心

うつくしとわが思ふ心
心ハ早河のことくハ恋る心
乃強くかゝりくるを
し古今集ニ勝情と
せきぞかねつるとよ
ま日イニめぐりめぐる
しと皆うつして同じ
何をやまとよとよる
青山ハ宅於謂歴ミこと
山ノ白雲此ニ明なるを
いちしるくといふなりき

687
愛（イめぐし）常吾念情速河之
うつくしとわがおもふこゝろはやかはの
雖塞塞友猶哉將崩
せくとせくともなほやくづれん

688
青山乎横殺雲之灼然（イしるく）
あをやまをよこぎるくものいちしろく
吾共咲為而人二所知名
われとゑみして人にしらるな

689
海山毛隔莫國奈何（イいかゞ）鴨
うみやまもへだゝらなくになにしかも
目言乎谷幾許之寸
めごとをだにもこゝだともしき

庫部ハありとめり人の見るまへにかくて我と目見がちにして我
中をかくなきに人の知るも遠猶て恨みつゝむれの多き
海山をへだてたらなくにといふハいかなるこゝろぞとも云海山を隔てし
中にハ何ぞあらぬにハ見えこともかくのおほきも
らるゝをたにかなしとおもふうちハ見てなきて心をとゞめてあるさまとぞ

てれる日とハひるにて
闇の月も暮て照日
をもやみに見なすとさ
なきし月をもてぬらす
わかそて人あるみも
よめるなるへし

690
悲別歌一首　大伴宿禰三依

照月　闇尓見成而　哭涙　衣沾津　干人無二

てれる日をやみにみなしてなくなみた
ころもぬらしつほすひとなしに

もゝしきの枕詞や
あまた人の中にも
中にも奥儀おもふ心に
のりてハ心に思ての百敷
ハ百敷の座をもて知る心也
うはへなき妹とハ
八重にかおもふうはへなき
情なき心也上下心
寄せるかの義よく
かなへるなるへく

贈娘子歌二首　大伴宿禰家持

691
百礒城之　大宮人者　雖多有　情尓乗而　所念妹

もゝしきの大宮人ハおほかれと
こゝろにのりておもほゆるいも

692
得羽重無　妹二毛有鴨　如此許　人情乎　令盡念者

うはへなきいもにもあるかもかくはかり
ひとのこころをつくすおもへは

大伴宿禰千室一首

あきつのも人のと云
もハ雲のたなひく一たひ
かくのみに恋や渡らん
かくしてハ助字也
秋津野ハ雲か絶々
にたなひく[illegible]
かくの如く恋渡らんと也

693
如此耳　戀哉将渡　秋津野尓　多奈引雲能　過跡者無二

かくのみにこひやわたらんあきつのに
たなひくくものすくるともなしに

雲ハ絶るる物なれハ
第三第四句ハ枕詞也
恋くさをちから車に
恋の草のかさをよめ
上詞林案に云ふ此歌の意
ハ草の如く恋の数々
乃先生案のうちにも
き車なれハ力車といふ七車ハ七つまて
こひハとそ恋のさ

廣河女王二首

694
戀草呼　力車二　七車　積而戀良苦　吾心柄

こひくさをちからくるまにななくるま
つみてこふらくわかこゝろから

695
戀者今葉不有常　吾羽念乎　何處戀其　附見繋有

こひハいまハあらしとわれハおもひしを
いつこのこひそつかみかゝれる

696

一首　石河朝臣廣成

家人尒　戀過目八方　川津鳴　泉之里尒　年之歴去者

いへひとにこひすきめやもかはつなく
いつみのさとにとしのへゆけは

697

大伴宿祢像見　三首

吾聞尒　繫莫言　苅薦之　亂而念　君之直香乎

わかきゝにかけてないひそかりこもの
みたれておもふきみかたゝかを

698

春日野尒　朝居雲之　敷布二　吾者戀益　月二日二異二

かすかのにあさゐるくものしく〳〵に
あれはこひます月にひにけに

へひとに恋過めやもし
見安云家人ハ家のひと也
家あるしと云也　借い
つみの里　山城ノ国相楽郡
あやしこハ家の字ノ誤
すゑんやの也　見字ノ誤
ますを入る本もと云ル同
わかきゝにかけてな
我聞やをふりけしな
いひそとし　[illegible]
き人を君かきゝくう
けりそしとする心は
同しかりことハ訛て
これそん枕詞也とりとハ君か[illegible]也見安ニハ直香ゆきさりとて君か
在所やみハ寝不をも云とそり或本ニハ直香とあり和名ハ云方同
かすかの野にあさゐる　しく〳〵にハしきりにと同しまりなと云也月にひに

699

一瀬二波　千遍障良比　逝水之　後毛将相　今尒不有十方

ひとせにはちたひさはらひゆくみつの
のちもあひなんいまならすとも

700

到娘子之門作歌一首　大伴宿祢家持

如此為而哉　猶八将退　不近　道之間乎　煩參來而

かくしてやなほやまからんちかからぬ
みちのあひたをなつみまゐりて

701

贈大伴宿祢家持歌二首　河内百枚娘子

波都波都尒　人乎相見而　何将有　何日二箇又　外二将見

はつはつにひとをあひ見ていかならん
いつれの日にかまたよそに見ん

けにハ月每日每ニ我ハ益
ますますと也　第一第二の句ハ
例乃さしくしといへん詞也
ひとつせにあみちく
一瀬のうちに波千
重にさはりても別れけ
あらたまに流れおちて
後に逢ふと也　後もあふ
ひとつゝ也　仙臣いひし也
みハちらひさはりても
同心なり　猶去臣の説
めくまてやなほや
あやハよて学や也
そてあたてゆかんとそ
はつはつに人をあひ
はつはつハまつかに也

やかくまつりたる中ハ
塵のまとゞへくを恨
らねハこハりたる〳〵ハ今宵の
月のみよかりなんと歎
くなりけるべし
ぬばたまのこよひの月
こよひとハ夢見て枕
を云なるや又ハねる
まへにこそ忘れもせめ
ありしことハわすれ
まし忘れずもと
わがせこをあひ見
こよひのかれそめしと
たくなはの永き命をと 童蒙抄云たくなはとハ白き縄を云
日本紀二日以千尋(チヒロ)栲縄(タクナハ)結為百八十紐(モヽムスヒニユヒテ)云 万葉古今集にあまたある
そらきこあることしられる人乃心ハ久しく人を見まくほりて

夜干玉之其夜乃月夜至于今日
ぬばたまのそのよの月夜けふまでに
吾者不忘無間苦思念者
われはわすれずまなくしおもへば

巫部麻蘇娘子(カナイヘノマソノヲトメ) 二首

吾背子乎相見之其日至于今日
わがせこをあひみしそのひけふまでに
吾衣手者乾時毛奈志
わがころもでハひるときもなし

栲縄之永命乎欲苦波
たくなはのながき命をほしけくは
不絶而人乎欲見社
たえずて人を見まくほりこそ

命ともかくやらんといへるとなり然れハ永きといへる枕詞也
永き命をほしくハ絶ず君を見ん為命ありたきとなれ絶ずと見ん
かすりしこころの愛
とねかつらいかする妹と
見安云をねかつら花
かつら同じ 袖中抄云
是ハ女乃花の鬘を
敦隆類聚古集に葛
部に入られたる文字も
蔓と書て葛まきる上
りかす 仙覚云万葉今する妹
始て笄(セウカンサシ)などかつらしたる女と
とねかつらしとする妹
若かつらする妹ハ香
ありし物をほりする妹
とうこしく思ふまへし

贈童女(ヲトメニオクル)歌一首 大伴宿祢家持

葉根蔓今為妹乎夢見而
はねかつら今する妹をゆめに見て
情内二恋度鴨
こころ乃うちにこひわたるかも

童女報(カヘシ)歌一首

葉根蔓今為妹者無四呼
はねかつらいまする妹ハなかりしを
何妹其幾許恋多類
いかなるいもそここたこひたる

贈大伴宿祢家持歌二首

思遣為便乃不知者片𡷯之 栗田娘子
底曽吾者戀成尓家類
おもひやるすべのしらねばかたもひの
そこにぞわれはこひなりにける
復毛将相因毛有奴可白細之
我衣手二齋留目六
またもあはんよしもあらぬかしろたへの
わがころもでにいはひとゞめん
一首 豊前國娘子大宅女（ヲホヤケメ）
夕闇者跡多豆と多頭四待月而
行くる吾背子其間介母将見
ゆふやみはみちたど／＼しつきまちて
ゆかんわがせこそのまにもみん
一首 安都扉娘子（アトノトホツメ） 安都ハ氏 扉ハ名
三空去月之光二直一目
相三人之夢西所見
みそらゆく月のひかりにたゞひとめ
あひみし人のゆめにしみゆる
三首 丹波大女娘子（タニハノオホメノヲトメ） 丹波ハ氏 大女ハ名
鴨鳥之遊此池介木葉落而
浮心吾不念國
かもどりのあそぶこの池にこのはおちて
うきたるこゝろわがおもはなくに
味酒（うまさけ）三輪之祝我忌杉（いはふすぎ）
手觸之罪歟君二遇難寸
うまさけをみわのはふりがいはふすぎ
てふれしつみかきみにあひがたき
垣穂成人辭聞而吾背子之
情多由多比不合頃者
かきほなす人ごとききてわがせこが
こゝろたゆたひあはぬこのころ

おもひやるすべの意了
仙曰すへハ茶垸也云々
覚私云或人云延喜式
云片垸（カタモイ）者底（ソコ）深器（フカキ）云々ニ
是上仙抄ニ云東吾云い
たよりなき方へやる使なれ
ば[illegible]底なきの心あるを
也片垸ハ底あるを[illegible]と
いはん枕詞也片ハ助字
またもあはんよしも
別を惜む意也いとい
はつきりつゝ也
夕やみハみちたど／＼し
或云ニ[illegible]とくしと云を
月待てゆかんを[illegible]
こと[illegible]ハ月待也[illegible]

行んするせこ[illegible]ハ月
待ゆかれよもえんと也
相見しのせこハ[illegible]
みそらゆく月のひかり
心ハ高[illegible]
[illegible]
かもどりのあそぶ池
序也うかへる心とそ
まめなる[illegible]
心をいふ也 浮虚の心
うまさけをみわれ
味酒三輪ハ集中ニ注ス
いはふ杉とハ三輪の神
ある[illegible]ハ祝子（ハフリコ）もし
くは不浄乃人神[illegible]ハ神の罰あれハよく[illegible]と
かきほなす人とは[illegible]
垣保なす人とハ我中を隔つるを云又安氏

人ごとしげく我と人のこころとはいへよりもひはやすまるを我とふ
こころのお沼ふかきふかる
うたふべし
こころにはおもひはれど
こひそれとひなる
よそにしてよそにたつ
てゐるなげきをとよ
めりよしはよそにてなげき
ちどりなく佐保の
瀬旨我在る人乃あ
ひまなくかよふる
ちかしゆかんと
よるひるもわかき
昼夜わかず恋る心
夢には君見えずやとさと
流れまちあすゆるらん

贈娘子歌七首
大伴宿禰家持

714 情尓者思渡跡縁乎無三外耳為而嘆曽吾為
こころにはおもひわたれどよしをなみよそにのみしてなげきぞわがする

715 千鳥鳴佐保乃河門之清瀬乎馬打和多思何時将通
ちどりなくさほのかはとのきよきせをうまうちわたしいつかかよはん

716 夜昼云別不知吾恋情蓋夢所見寸八
よるひるといふわきしらずわがこふるこころはけだしゆめにみえきや

717 都礼毛無将有人乎独念尓吾念者惑毛安流香
つれもなくあるらん人をかたおもひにわがおもへればまどひもあるか

思ひこ乃しは惚さ
何るりのみはかな
おもはぬに妹がゑまひを
見ゆはえんしゑまひ
笑顔をさとして
こころにいとみまえ
て燎るとの事
ますらをとおもへる我を
みつれにみつれ乃をは恋
ゐ就まで大丈夫ぶ
我をみ恋り難白さるる
ここ心のみさへも乱れ
就て片恋ひせんと
むらきもとはむらきもの
むらきもといふ詞に
肝乃胸にあるといふ

718 不念尓妹之咲儛乎夢見而心中二燎管曽呼留
おもはぬにいもがゑまひをいめにみてこころのうちにもえつつぞをる

719 大夫跡念流吾乎如此許三礼二見津礼片思男責
ますらをとおもへるわれをかくばかりみつれにみつれかたおもひをせん

720 村肝之情摧而如此許余恋良久乎不知香安類良武
むらきものこころくだけてかくばかりわがこふらくをしらずかあるらむ

献天皇歌一首
大伴坂上郎女

721 足引乃山二四居者風流無
あしひきの山にしをればみやびなみ

妻宰王乃手ふ涙を
こゑくは盛るゝ
何といふの山ふしとれは
よしとる手にハ風流乃
ゆくよしもあきゝ山
住のあやしき乃者をれを
風流なうすゝうくりな
るよし足ゆふしあへとゝ

吾為　和射乎　害目賜　名
わがするわざをとゞめたまふな

一首　大伴宿祢家持

如是許　戀作不有者　石木二毛
かくばかり恋つゝあらずはいはきにも
成益物乎　物不思四手
なるましものを物おもはずして

かくばかり言つゝあけ流ハ
盛つ身もいかれすハ
し獄涙に盛つゝあらん
するふハ思あみもあり
ましとよめり此ころ字す
書くハ心なき殿ゝ丑
東流の徐ようき路
とこよふとわりゆのく

従跡見庄贈賜留宅女子大嬢歌一首并短謌　大伴坂上郎女

常呼二跡吾行莫國小金門尓
とこよにとわがゆかなくにこかなどに
物悲良尓念有之吾兒乃刀自緒
ものかなしらにおもへりしわがこのとじを
野干玉之夜晝跡不言念二思
ぬばたまのよるひるといはずおもふにし
吾身者痩奴嘆丹師袖左倍沾奴
わがみはやせぬなげくにし袖さへぬれぬ

如是許　本名四戀者　古郷尓
かくばかりもとなしこひばふるさとに
此月期呂毛　有勝益土
このつきごろもありかてましを
こみれきころも何ありそましを

反歌

朝髪之　念乱而　如是許
あさかみのおもひみだれてかくばかり
名姉之戀曽　夢尓所見家留
なねがこふれそゆめにみえける

此哥跡見乃里ありし
すめるにくだりてしき跡見
庄はありて今も未
詳愚按此集八に稲公
の跡見庄にてよめる鹿人の
哥に二つゝめるてとある
をみれハ都のほとりなる
所なりと我はおもふなり
むかし人のさためと
よめる哥ハ常ハ人乃さめ桜をとりてゆめんとハ何ともハあつふにとゝけね
ほりまよや大和乃國中りて見つく哥乃心ハとこよふとハ我ゆのをつゝふとハ
仙回とこよハ蓬萊路也心ハ其此淵へ君ゆんとハ常ふ住と云きて
此ハうきしめとき又哥云とひとうきの路へゆかねもとを跡見ふ離れ居を歎
こりあこ仙がるハ小金門をこハ立もしふきふさうにみゆるとなり云東こりあハ金
門を金ふて作れる也日本紀十三におほすへ大臣籠りかねと門ける釋云金戸
世言之私記云古ハ金作を以天子此門户を作れりきくこ此集のハ常の門よ

何かはと准て知べし　此うたハ此物しくといへどおもしろく聞ゆ　此歌ハ助字あまり
此ハ我娘乃刀自ぞ我をまつらん何ゆゑか我の言の母氏え出ありてよるひる思ひなげく也
わがこ乃こと　刀自ハ女官也　禁秘抄に刀自　唐衣體也　結ひ帯などあ
る物をいふ也　順和名二負と出　老女をとうじといふ　家の刀自ハ女の惣名にて
とあり　而後ハ女をさしていふぞ　此ハ我子が母へあてたる歌なり　此ハ女乃惣
名といふ義に聞ゆ也　ちちのみの　なく子のしのぶハ皆助け字也
ましおもひにて　さもありしこそハよしとなす　こひしのぶの心かわれをおもふし
何ぞあらぬを　さし堪ぬへき物なし　全篇の思ひをきさいことよりおもへばしも
ゆかす跡見の庄にありてあるうちよろづまいと猶しかりともところのわか
むすめのうへを猶もよるひるおもひやせけく小袖ひるすまでさへあり
かくなり思ふとも八此月比もたへてありとも堪へきをとりよりせし此うへの庄
にありけるのらし
何さかけ乃家をひらきいれて　記録ハいまだゆるさるれど書きひとつらねれと
いかん雅録しがうち思ふしき宗になるゆゑなるハいらぬる思ふらやこの心
みるものをもハ助字也　或本乃此後まで右歌ハ報贈大嬢歌也ととる
行もあらかゆや此ありけるしもておもふや

727　　　　　　　　　　　　726　　　　725

にほどり乃かづく池の
みの心といひかけて
入る鳥のかづきすむ池の
や心あらバ君に我
恋ふる心を告示
よせよと嫌ふなり
いやしみよめるハ天皇
ま直にアハ恐あれバ
し示ハ玉篇以事告
人日示とあり
ようにゐて恋つゝ
君が池乃鴨とありまほしくて
とも君が家にすむなり
しらぬの心
雖絶数年　家持と
大嬢と中たえて数

献二天皇一歌二首　在二春日里一作也
大伴坂上郎女

二寶鳥乃潜池水情有者君爾吾戀情示左祢
にほどりのかづく池水こころあらば君にわがこふるこころしめさね

外居而戀作不有者君之家乃池尓住云鴨二有益雄
よそにゐてこひつゝあらずは君が家の池にすむといふ鴨にあらましを

贈二坂上家大嬢一歌二首　雖レ絶二數年一復會相聞往來
大伴宿禰家持

萱草吾下紐尓著有跡
わすれぐさわが下ひもにつけたれど

728

をとてかくふしきまた又 鬼乃志許草事二思安利家理
何ひてせうらしとい しこのしこぐさことにしありけり
くろすとし複く二後とき

人毛無 國母有糠 吾妹兒与
ひともなき くにもあらぬか わぎもこと
携行而 副而将座
たづさはりゆきて たぐひてをらん

わすれ草わかしたひもに
八雲抄云孫て名つき
世に通る萱の事也
三れんとすれともえわすれすと以て見上下置哥抄は我同奥儀抄云萱
草二ハ萱草を云也兼名苑ニハ三憂草と云り忘をみれハうきをこたはる
也とふの事ニ言ふハ紫苑也是をとれハ物忘せすと云り下略袖中抄云
とふの事ニ云ふとハ則乃事を忘れりあしすと言ふ事ニなき事を言ふ
萱草ハ忘れハむつましき人を云れん新か下ひもふ付れとも又よくし事も
萱草と以ふ名ハ只忘ハりこころをとれ極卑しけれハ鬼の事に言ふへきり
名りこ云ひ四ハ中のの歌もへあしすわすと云ひ忘てしそかとこしかわ
しと嫌ひ侍し日本紀弟子不須也 内門汚穢之處と こされハ事にハ
わろきをとるよへき字をよめり 醜 同字也 奥儀抄と義さ志哉て侍ぬ
人かちきるもあぬ 人目りせうきて宗仮て之を逢ふきねを

729 730 731

歌をきてよめる意之
こゝろなしハ見ゆゐも
玉ハよきよきかても
人とつめすおハ人目
あまハ玉のことくふ
ハ言すし紀君を
玉あるハやよなまん
物をとし見にまくふ
まにとる哭
行ろんまたこをあらんと
なの夜ハ我相に同逢
夜ハつゐもあらんを何
するをて見きし都か
逢ていつらひける
まろと悩む嘆し事乃ちけきものもハ嶺ち嘆ること
わか名ハもちあまも八御宮之千名五百名ハ言ひみしきこと我名

贈二大伴宿祢家持一歌三首

大伴坂上大嬢

玉有者 手二母將卷乎 鬱瞻乃 世人有者 手二卷難石
たまならば てにもまかんを うつせみの よのひとなれば てにまきがたし

將相夜者 何時將有乎 何如為常香 彼夕相而 事之繁裳
あはんよは いつもあらんを なにすとか かのよあひて ことのしげきも

吾名者毛 千名之五百名尓 雖立 君之名立者 惜社泣
わがなはも ちなのいほなに たちぬとも きみがなたたば をしみこそなけ

ハいくたひありしうとも切りくし云へりなり我ゆへ立つなハ切き歌りんとゝ
つましくし名の詞
今ハ也ハもしくのし
二あり助字也大嬢ヵ故
まハ我名を重て立と
てもかしくも有る也
うつせみのよやもし
ふたゆくハ穉ふゆくて
ひゆきくるハの也
世やものもハ助字也
此哥ハ大嬢ヵ阿よりの彼あまあひくまの志はまもこゝろよ和せと
る哥よへしかくかくてひまてあきてくるまきまよろこひへき
志けくともはまとてヵおほそ拙ハねんいつもしあかんとし
まろおまひくて
此哥ハ玉をうくハまのす
まもんをとりふ和せ

和歌三首　大伴宿祢家持

732
今時者四名之惜雲吾者無
いましくし名乃かりくも我ハなし
妹丹因者千遍立十方
いもりよりてハちへたちとも

733
空蝉乃代也毛二行何為跡鹿
うつせみのよやもふたゆくなにすとか
妹尓不相而吾独将宿
いもにあはすてわかひとりねん

734
吾念如此而不有者玉二毛我
わかおもひかくてあらすハ玉にもか
真毛妹之手二所纏牟
まこともいもかてにまかれなん

里かくてあらすハとハ切く
てのこあられすハとも
玉のもハ玉のかる之
まことものもハ助字也
我身を玉ふ成ても
常ふ妹にまかれんと也
かすか山かすみたなひき
仙日心ぐくハ心おやま
くとこゝ也哥乃字くて
ことも也須補書誤あり
やぞくるも
月よにハかとにいてゝ立
ゆふけとひハ夕ふ辻占
あし問也足占ハ足踏の
数まく占すると
後ハゆかまくをほりハ

贈家持歌一首　大伴坂上大嬢

735
春日山霞多奈引情具久
かすかやまかすみたなひきこゝろくゝ
照月夜尓独鴨念
てれる月よにひとりかもねん

和坂上大嬢歌一首　大伴家持

736
月夜尓波門尓出立夕占問
つきよにハかとにいてたちゆふけとひ
足卜乎曽為之行乎欲焉
あしうらをそせしゆかまくをほり

贈家持歌二首　大伴坂上大嬢

ゆのやまハさゆりと
なりつまハ人ハいふとも
古本のは仙豆なりとぞ
若狭路の後瀬の山ハ
後こゝろんに心通せと
おもふのにましき
をこゝろくしハ古ゑ
しきは苦恋の数し
まつりをよみり播と
さらく死てんハ世間
の若さき物に恋すと
のちせ山のちもおりと
なれおりんとさゞめとり
かなれもあれさへすハ
ぞく死ぬべきいをと
ことのみをのちも

云云人者雖云若狭道乃
かにかくに人ハいふともわかさぢの
後瀬山之後毛将念君
のちせ山ののちもあはんきみ

世間之苦物尓有家良久
よのなかのくるしきものにありけらく
恋二不勝而可死念者
こひにたへずてしぬべくおもへハ

和坂上大嬢歌二首　家持

後湍山後毛将相常念社
のちせやまのちもあはむとおもへこそ
可死物乎至今日毛生有
しぬべきものをけふまでもいけれ

事耳乎後毛相跡懃
ことのみをのちもあはんとねもころに
吾乎令憑而不相可聞
われをたのめてあはざらめかも

ゆめのあひハ苦しきものをおどろきて
むなしさの身のいまさら夏とへ
おもひおもひてまさらやと
ゆめのあひハくるしかりけり
夢中にあひてハくるしき
さめてのちかきさぐれども
しきりにひし妹もなし
さりかね
ひとへのみ妹がむすばん
恋にやせて腰の
おびくなりし也
わがこひハちびきの石を

八雲御抄云千引のいハ
千人してひくいはなり

更贈坂上大嬢歌十五首
大伴宿祢家持

夢之相者苦有家里覚而
ゆめのあひハくるしかりけりおどろきて
掻探友手二毛不所触者
かきさぐれどもてにもふれねバ

一重耳妹之将結帯乎尚
ひとへのみいもがむすばんおびをすら
三重可結吾身者成
みへむすぶべくわが身ハなりぬ

吾恋者千引乃石乎七許
わがこひハちびきのいはをなゝばかり
頸二将繋母神之諸伏
くびにかけんも神のまにまに

そのいハ七ツばかりもそれをくびにかけるやうなるおもきおもひなりとも
いかにしかみのまにまにハ神之諸伏とかけるとやうなるおもきおもひをすら周禮云

744　745　746　747

師說　夕門乃石を前に蹲ていひし詞なれは伏つきこし神のことは詞伏こしつゝ祝
詞し神の社を宮こ云ことゝ通ことの祈と云詞心きうしく見安三ハ神も共よ
伏まりんの心しこと当由之
ゆふされハやとあけまけ
やとあけまけていはけ
まちけむしとふ人ハさき
らねハ夢に逢んを頼ん
と思つゝ夢さめてや
あさゆふに見んときさく
朝夕に見んとおもへる
時さへやみれとも見ぬら
ことく恋わりんとや
もてみすハ夢とし
いけるよにわれハまさ
夢乃袋を縫と云し
われ身にやことし

暮去者屋戸開設而吾将待
ゆふされハやとあけまうけてわれまたん
夢尓相見二将来云比等乎
ゆめにあひみにこんといふ人を

朝夕二将見時左倍也吾妹之
あさゆふにみんときさへやわきもこか
雖見如不見由恋四家武
みれとみぬことなほこひしけん

生有代尓吾者未見事絶而
いけるよにわれはまたみすことたえて
如是何怜縫流嚢者
かくおもしろくぬへるふくろは

吾妹兒之形見乃服下着而
わきもこかかたみのころもしたにきて
直相左右者吾将脱八方
たゝにあふまてはわれぬかめやも

748　749　750　751

てハ言語同断の心なりとあはれげなる事ひしきハ世をはなれんとすること
わきもこかたみの衣　したにきてたゝにあふまてはとハ直に逢ときを云
恋しく思ふ心ほし
恋しなんそれもおなしそ
こちたくハこといてゝくい
らぬ心人目をいひ人言
どうするてあひて何うハ
死ぬハ一恋死なん回
うきとあハ人をとも
とよそてあひてわひそ
らましんとし
ゆめにまさえてつら
みてとふまえてすき
おもひしわかひし
始めたれなりし時ハ
一面に行程て往ても

恋死六其毛同曽奈何為二人目他言辞痛吾将為
こひしなんそれもおなしそなにせんにひとめひとことこちたくわかせん

夢二谷所見者社有如是許不所見有者恋而死跡香
ゆめにたにみえはこそあれかくはかりみえすしあるはこひてしねとか

念絶和備西物尾中中尓奈何辛苦相見始兼
おもひたえわひにしものをなかなかになにかくるしくあひみそめけん

相見而者幾日毛不経乎幾許久流比尓久流必所念鴨
あひみてはいくかもへぬをこゝたくもくるひにくるひおもほゆるかも

こし梅を中く小逢
袖ても梅にいよされい
かくよめり
あひそてハいくりも
こひハいやまさるを
いまそひハ狼小狼を
何ひくてのち日頃も
かくえかわたもけよ
〔又とおもへりしまと云るとゝ〕
一説来日小来日し毎日と
分ゑ出けく自由なり
ぬ中とかく使み云て
こひちハいくせんとな
けくはる一
あひえてハまうりも
よのねるわりしそ

752
如是許　面影耳　所念者　何如将為　人目繁而
かくばかりおもかげにのみおもほえば　いかにかもせん人目しげくて

753
相見者　須臾戀者　奈木六香登　雖念　弥益　戀来
あひみてはしばしも恋はなぎむかと　おもへどいよいよこひまさりけり

754
夜之穂杼呂　吾出而来者　吾妹子之　念有四九四　面影二三湯
よのほどろわがいでゝくれば　わぎもこがおもへりしくしおもかげにみゆ

755
夜之穂杼呂　出都追来良久　遍多数　成者吾胸　截焼如
よのほどろいでつゝくらく　たびまねくなればわがむね　きりやくがごと

云ハなまんとハ心なまそ云の体も心も心ハ
詞林采葉云よれるハ夜のあくる頃と足要

云夜のあくると明　子東ハまかしくよこそかるのとも云明
て我けりされハ女乃別れしこそりてよ衣手傍云て云しとそ
夜のわかれ出てゆくくらくハまるし夜のあくるを別出そゆる
るり段多くひらされハ独まかりやくらく心にまさしひく如き
別乃うきかるも
ふかくのさねくと
如乃るくとなくさめ
いるゝや
諮問　云ふ也
贈答　坂上大嬢の和答
のあいつくまて脱簡か
ようにねくこゝまてそ
けわまもこハ我にとう
こと云さたまてあひ
こんこといりせよとハ

贈妹坂上大嬢歌四首

田村大嬢坂上大嬢並是右大辨大伴宿奈麻呂卿之女也卿居田村里号曰田村大嬢但妹坂上大嬢者母居坂上里仍曰坂上大嬢于時姉妹諮問以歌贈答

大伴田村家之大嬢

756
外居而　戀者苦　吾妹子　次相見六　事計為与
よそにゐてこふればくるし　わぎもこを
たえずもあひみん　ことはかりせよ

757　758　759　760

れ次て逢てんえり
ことをせりとや
とをくあらはわひても
遠ニハ一向ニ逢難く侘
つゝも有へきをとこし
ちかけれは見るにかたく
しらくものたなひくといふ様
重ねていふ心の恋しさ
しけくもかなしみこと
いかならんときにかいもを
入安云むくらのけに
きやとハ蓬の生たて
いやしき宿に君来けり
らりさ常と早ぬし
うちわたすは竹田の原
八見か竹田原山城と

とをくあらはわひてもあらむをさとちかく
遠有者和備而毛有乎里近
ありとききつゝみぬかすへなさ
有常聞乍不見之為便奈沙

しらくものたなひくやまのたかたかに
白雲之多奈引山之高高二
わかおもふいもをみんよしもかも
吾念妹乎将見因毛我母

いかならんときにかいもをむくらふの
何時尓加妹乎牟具良布能
けかしきやとにいれまさしめん
穢屋戸尓入将座

従竹田庄贈賜女子大嬢歌二首
大伴坂上郎女

うちわたすたけたのはらになくたつの
打渡竹田之原尓鳴鶴之
まなくときなしわかこふらくは
間無時無吾戀良久波

761　762　763　764

うちわたすとハうち渡す
我里乃鶴の声と咲
てなれて啼ける序歌
もやなきの世なり。
第一第二句ハ下をいはん
乃序にて早川ふよるよし
あまき身とひいはて
おもふ事もあきらめ
子を憐むなるや
かみさふといなにハあらず
かくさふにいなとハいはず
おかハいにしへなる神
さひたるとて何ぞ
あはれも多分けやすく
えてさかゆきまた
世にいはさゆへ

はやかはのせにゐるとりのよしをなみ
早河之瀬尓居鳥之縁乎奈弥
おもひてありしわかこはもあはれ
念而有師吾兒羽裳阿怜

贈大伴宿祢家持歌二首
紀女郎（女郎名曰小鹿）

かみさふといなにはあらすやはたやは
神左夫跡不欲者不有八也多八（一云八多也八多）
かくしてのちにさふしけんかも
如是為而後二佐夫之家牟可聞

たまのををあわをによりてむすへらは
玉緒乎沫緒二搓而結有者
ありてのちにもあはさらめやも
在手後二毛不相在目八方

大伴宿祢家持和歌一首

ももとせにおいしたいてゝよゝむとも
百年尓老舌出而與余牟友

765　766　767　768

わかはいとはしこひはますとも
吾者不厭　戀者益友

在久邇京思留寧樂宅坂上大嬢大伴宿祢家持作歌一首

765
一隔山　重成物乎　月夜好見　門尓出立　妹可将待
ひとへやまへなれるものをつきよよみかとにいてたちいもかまつらん

和歌一首　藤原郎女

766
路遠　不来常波知有　物可良尓　然曽将待　君之目乎保利
みちとほみこしとはしれるものからにしかそまつらんきみかめをほり

おいのしたをいたしといへり
又安云舌出とハ歯を
合せてもの云ふ也　玉藁合
せかし歯の離れたる
ハ口をあきても舌を
いたす事なくてもの
はなしをいふ　歯のなき
者ハかむ事ハ歯なくての
ほとも舌をいたし出さ
るとせぬも舌出て
又安云老て口〔開〕して舌
の出るといふ玉藁よくいへ
ると云し　イニとよむこ和久同義し心ハ神さふと読しをしいをとつけもとけとと云々
ひとへやまかさなる　一隔山嵯山を隔て君がさにこの月の夜門に出
て妹の我をまつらんとし　ふのはとあるの中に此山かさなり隔あれ

みちとほみこしとハ　一本二　此哥ハ藤原郎女聞之即和歌とある家持の坂上
大嬢へといひやりてよめるを藤原郎女はやく見て此に和せる歌なり　月をめて
とハ月みえんまてをねかひたまふにていくへ山をへたてたるをけれハ君か来る
かしこハ知かたくきりさやかに坂上大嬢の待ゐるらんとし

更贈大嬢歌二首　大伴宿祢家持

767
都路乎　遠哉妹之　比来者　得飼飯而雖宿　夢尓不所見来
みやこちをとほみやいもかこのころはうけひてぬれとゆめにみえこぬ

768
今所知　久邇乃京尓　妹二不相　久成　行而早見奈
いましらすくにのみやこにいもにあはすひさしくなりぬゆきてはやみな

みやこちをとほくやと
又安云うけひてぬれとも
ハいめの事をきこてねまし
とも祖宗神秘云うけひハ
日本紀に或ハ祈と云或
ハ誓とかけり　うけひ
てぬとよめるハ祈と同
えしり誓と同じ
〔玉藁〕　都路をとほみや
何ゆえん祈てねしも
此比ハ妹か夢にもみえこねとしてまねさいらんとて結語のまとはせ
ことよめり　夢見んとてハ如童菩薩の名を唱へ衣をかへしてねしといへり

いやちこなるしるしの如く　久迩乃都なれども見しなり今日来ひ来るりて早く
妹はありて久く間しも見ねば
見んものと見ねばかなはん

ひさかたのあめのふる
久堅ハ天乃枕詞なるを
天にいひかくる事也
帰りてかくいふせかりけ
見ハ心もとなき事也
紀女郎ニ何をして夢
よ独居の侘しさ也
ひとめおほみあはざる
身こそ人めをおそれて
何かハわすれむ也
けり
いつはりもにつきてそ
見安云　似付而曽為流

報(コタヘ)贈(ル)紀(ノ)女郎(ニ)歌一首　大伴宿禰家持

769 久堅之雨之落日乎直獨　山邊爾居者欝有來

ひさかたのあめのふる日をたゞひとり
やまべにをればいぶせかりけり

從(リ)久迩京(ニ)贈(ル)坂上大孃(ニ)歌五首　大伴宿禰家持

770 人眼多見不(二)相耳曽情左倍　妹乎忘而吾念莫國

ひとめおほみあはざるのみぞこゝろさへ
いもをわすれてわがおもはなくに

771 偽毛似付而曽爲流打布裳

いつはりもにつきてぞするうちはきも

似付くしくするなと也
眞実うち出しもいはぬ妹か
まことをいはん事もなく妹り
我を念ふといふハ似付
もせざる偽なるべし
ゆめにだにみえんと我ハ
見安云　保杼毛友ハ
みえさるとも也　眞実乎の
身をゆきにくいたはねを
みぶにみえんと我ハ祈
これと妹かおもはれ
ねがふも見えさらんを
こゝろにね也

眞吾妹兒吾爾戀目八

まことわぎもこわれにこひめや

772 夢爾谷將(二)所(一)見常吾者保杼毛友　不(二)相志思(一)者諾不(レ)所(レ)見武

ゆめにだにみえんとわれはほどけども
あひしおもはねばうべみえざらん

773 事不(レ)問木尚味狹藍諸弟等之　練乃村戸二所(レ)詐來

こととはぬきすらあぢさゐもろちらが
ねりのむらどにあざむかれけり

774 百千遍戀跡云友諸弟等之　練乃言羽志吾波不(レ)信

もゝちたびこふといふとももろちらが
ねりのことばしわれはたのまず

仙拶并見安云こゝろはねとハ物をねたますハ木さへあぢ
あぢさゐとハ口を噤みて物をいはぬ事也もろちとハ諸兄ハ上下ニ訛
乃ある妹ニ云しねりとハ心をねるを云村戸とハ御所のことハ四五間
もたくましき妹ニ云あざむかれけりとハ戸乃内ニ人のあるやとする

されハかりといひし至凉なの事をへて揃りやうなる蔀戸のとろちよめあおわか
乃材戸の役宗めく式説ニあちきねハ何ちきりふと同趣にねぶの上に相
てよく削りておせハ味出ぬハよき板戸ともなる也とそろち練
とハ諸乃弟りやをりりて灰汁ニして能を練れハ白くうつくしくなる
ことくまたよく削りて白びて板に仕るを練の戸と云也母の穴ハね
ますを言を好きこいひしきすを練戸とさとて抑欺れたりと云也ミ鮑口訣
もくちよとひ忘れても彼仲乃浅弟ちもの鑢練乃袖まとみく百子
より忘しをいふとも我そとのますと云也仲人の袖をとのまてあさむれし

775

贈ル紀女郎ニ歌一首　大伴宿禰家持

鶉鳴故ナル郷ヨリ従念友何如裳妹爾相縁毛無寸

うつらなくふるさとよりおもへともなにそもいもにあふよしもなき

女を恨子罪する事なるや
うつらなくふるき里
鶉ハ荒てよるる所なり
里彼野とあるハ鶉
と鳴くなるらんと
よめる也かつてハ無し
まち拘るれハ妹をいふ
まれ添ふをいふんと

776

報ニ贈ル家持ニ歌一首

紀女郎

事出之者誰言尓有鹿小山田之苗代水乃中与杼尓四手

ことでしはたがことなるかをやまだのなはしろみづのなかよどにして

ことてしハこといひ出しと也
ことてしと云ハ初より出し事
なりしあゝとにハ中よる
みするし苗代なせき處
すみ乃苗代の中にて淀
むをよみへて云也かつてよみ

777

更ニ贈ル紀女郎ニ歌五首　大伴宿禰家持

吾妹子之屋戸乃籬乎見尓徃者蓋従門将返却可聞

わきもこかやとのまかきをみにゆかはけたしかとよりかへしてんかも

こみてハ我の家の我
六中るまかのすと

778

打妙尓前垣乃酢堅欲見将行常云哉君乎見尓許曽

うつたへにまかきのすかたみまくほりゆかんといへやきみをみにこそ

拾遺集兼家公長歌に
こまでらかくまかきに
小山田をもと云代も云
わかまもこりやとの雛を
姿を見んゆかんと八雅
いらんとさくゆかんの事へてとふよめり君ならんへきまかなとの也

うつくしくみゆるなる　此哥乃腰句類聚万葉等の古本ハ見ゆりしを新点ハ見ゆうりもこ義ハ同うけくさとハ童蒙抄奥儀抄等偏ニこゝろやすく袖中抄ニハうちまくてとこゝろよく寄心ハおの寄の若乃ゆゑのきゝとみるにゆゆんとうひし心さとゝもなるや我ひとくの雑のかたりさまゝを見んまゝほしさにゆゆんといふんや見まをてうりあれてこしゆゆんといへやいへらんやとりてまし袖中抄ニハ雑乃嘆きとハまへのもふにやすらふすりされとはり紐しハうちりて雑の立体ふ見るはるのをよゆんといゝりやとし見るとふにこうハ定ることし

いときまの心のまれ此哥も紀女郎ら家作ゆるなけて我ゆ縁切乃心を郡しかやま近きこ爾なれハ極みききの黒木作すしおふとをしろまハ修付の本之ころ申さうりせやをとり

779
板葺之　黒木乃　屋根者　山近之
いたふきのくろきのやねハ山ちかし
明日　取而　持将参来
あすもとりてもちてまゐこん

780
黒木取　草毛苅乍　仕目利
くろきとりかやもかりつゝつかへめと
勤和気登将譽十方不有
いそしきわけとほめんともあらす
一云　仕登母
一云つかふとも　第三句ちかへ

おの哥乃餘意を讀せりる雜役とも云て仕へめうも難面き人あまハ我労を知ふきと感する心も能を云ぬくらのようへハよんへし君の字しもあハ縄るも同もちらなとゑかぜうようへまハかみも妹うこめしよめるハ紀女郎ら女友達の孫よりしなきこてて感へし風そまとハ風烈きて吹心しへなハとハわうありるほとりふ吹て波をよする心し

781
野干玉能　昨夜者令還　今夜左倍
ぬはたまのきそよハかへしつこよひさへ
吾乎還莫　路之長手乎
わきをかへすなみちのなかてを

紀女郎裹物贈友歌一首

782
風高　邊者雖吹　為妹
かぜたかくへにハふけともいもかため
袖左倍所沾而　苅流玉藻焉
そでさへぬれてかれるたまもそ

大伴宿祢家持贈娘子歌三首

783
前年之　先年従　至今年
をとゝしのさきつとしよりことしまで
戀跡奈何毛　妹尓相難
こふれどなぞもいもにあひかたき

とゞしの所にありて
久しき逢をよめり
うつゝにはいはしも
妹か袂をまきねて
袖を枕にせしとなき
ぬの枕は手ねとそ
よきねかせとみれは妹
しらんかし
わかやとの草のうへ
上は露の命といへん
序なし
をられぬえいやしき
いやしきふるとは弥よく
しきりに降るとなり
をもきことは来はなとも
ゆめのこと思ほゆる

打乍二波更毛不得言夢谷
うつゝにはさらにもえいはすゆめにだに
妹之手本乎纏宿常思見者
いもかたもとをまきぬとしみれは
吾屋戸之草上白久置露乃
わかやとのくさのうへしろくおくつゆの
壽毋不有惜妹尒不相有者
いのちもをしからすいもにあはされは

報贈藤原朝臣久須麻呂歌三首
大伴宿祢家持

春之雨者弥布落尒梅花
はるのあめはいやしきふるにうめのはな
未咲久伊等若美可聞
いまださかなくいとわかみかも
如夢所念鴨愛八師
ゆめのことおもほゆるかもはしきやし
君之使乃麻祢久通者
きみかつかひのまねくかよへは

なくへはこれはくかくへき神とあそと遠く通 神中おこせるをうるしか
ことによそのくはやし君の使まらくゝるひとつとうさし夢をのと
そのなし
うしわかてて花さきき
此安云浦といふ所なる
也王業の米の梅の咲か
ゝきを種重て人の将
やしなふ事の深くて
我も花咲るとする迄
こゝろくるしおもほゆる
霞のたなひくときとは
ひくけふも事の心は
へはいかにしても覚ゆるを
こゝろこそ相心離く
するのはのそなはし
春風のいこえにきく

浦若見花咲難寸梅乎殖而
うらわかみはなさきかたきうめをうゑて
人之事重三念曽吾為類
ひとのことしげみおもひそわかする

又贈藤原朝臣久須麻呂歌二首
大伴宿祢家持

情八十一所念可聞春霞
こころくゝおもほゆるかもはるかすみ
軽引時二事之通者
たなびくときにことのかよへは
春風之聲尒四出名者有去而
はるかせのおとにしてなはありさりて
不有今友君之随意
いまならすともきみかまにまに

む序しゆりゆきてハかくあまことしゆきくの也今あるゆうしもとふ
出そしゆくをきあもりくあをゆきく路よいあうこもかくしもれ深あんと
とをあし深あう堅そとひくかへハ多も心ゆりんのとふくかし也
ゆくらい乃いしみよ

來報歌二首　藤原朝臣久須麻呂

奥山之磐影尓生流菅根乃
懃吾毛不相念有哉

おくやまのいはかげにおふるすがのねの
ねもころわれもあひおもはざれや

春雨乎待常二師有四吾屋戸之
若木乃梅毛未含有

はるさめをまつとにしあらしわがやどの
わかきのうめもいまだふふめり

序あらしすがのねのまでハねもころといはん
ためし根の字をかさね
いつきしゆひ歌もハされやとハ返ゆ殺もれ
あはしゆんやあひがゆんとの也

まうをまつとふしゆしのし淸アしまうをゆてさくへしとまやゆんとそめりこハ
八雲おほかめしと
いかりもいくめ也

萬葉集巻第四

貞享二年二月二十日於　新玉津嶋花亭重而書畢付六十一枚